

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320127

研究課題名(和文) プトレマイオス朝エジプトにおける文化変容の統合的研究

研究課題名(英文) Synthetic Research on the Acculturation in Ptolemaic Egypt

## 研究代表者

周藤 芳幸 (SUTO, Yoshiyuki)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：70252202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：プトレマイオス朝の支配下におけるエジプト領域部で進行していた文化変容の諸相を、現地調査で得られた史料に基づき、言語、エスニシティ、物質文化という三つの視点から分析した結果、この時代のナイル世界におけるモビリティの高さと、ギリシア系入植者と在地エジプト人との空間的接近性こそが、在地社会のヘレニズムを牽引した主要因であり、とりわけ両者の協同の場としての採石場の存在がきわめて重要であったことが判明した。

研究成果の概要(英文)：The aim of our project is to clarify the process of acculturation in the local Egyptian communities under the Ptolemaic rule. To accomplish this aim we prosecuted closer investigations in the area around ancient Akoris as well as at the Hellenistic quarry of New Minya in Middle Egypt. The Greek and demotic graffiti left on the walls and ceilings of the New Minya quarry in particular turned out to be the most valuable source of information to supplement the relevant data hitherto obtained from documentary papyri. After examining three aspects of the local society, i.e. language, ethnicity, and material culture, we have revealed that the process of acculturation in the local society made fairly rapid progress sometime in the latter half of the third century BC. It is now certain that thriving local industry at limestone quarries accelerated the process of acculturation in this district. The synthetic results of these investigations were published in 2014 from Nagoya University Press.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：ヘレニズム 文化変容 エジプト ギリシア ナイル世界

### 1. 研究開始当初の背景

プトレマイオス朝エジプト史の研究は、長らく古代史研究において二重の意味で継子の扱いを受けてきた。というのも、伝統的なギリシア史の視点に立つならば、たとえその支配層がギリシア系であったとしても、空間的にギリシアからは隔たり、在地の文化が圧倒的な存在感を示していたエジプトは、周縁的な存在に過ぎなかったからである。また、エジプト史の視点に立ったときも、プトレマイオス朝時代は「グレコ・ローマン時代」として、「王朝時代」とは截然と区別されてきた。その主たる原因は、この時代を研究する上での基本史料とされてきたギリシア語パピルス文書の特殊性・閉鎖性に由来しており、それ以外の史料、具体的には考古学的史料に基づく統合的な研究の推進が急務となっていた。本研究計画の策定にあたっては、このような状況を受けて、プトレマイオス朝史支配下の在地社会における文化変容の解明が急務であるという認識があった。また、長年にわたるエジプトにおける現地調査の成果の蓄積も、このような研究を実施する十分な準備が整っていることを示していた。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、上記の背景に照らして、プトレマイオス朝エジプト史を考察する際の鍵概念であると同時に、考古学的なアプローチが有効であると考えられる文化変容の諸相について、時代的にはプトレマイオス2世から5世の時代、空間的には中エジプトを中心とする領域部を対象として、同時代の地中海世界の動向をも視野に収めながら、その動態を明らかにしようとするものである。

(2) ヘレニズム時代のエジプトでは、独自の複雑かつ強固な凝集力を持つ文化を維持してきた在地住民を、それとは異なりながらも同様に高い伝統文化を誇るギリシア系支配層が統治していたため、社会のさまざまな局面で興味深い文化変容が生じていた。そのような文化変容の諸相を、独自に遂行する調査の成果を踏まえつつ、これまでの研究成果と統合することによって究明し、新たなプトレマイオス朝エジプト史像を構築することが、本研究の最終的な目的となる。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究では、ギリシア考古学・古代ギリシア史を専門とする研究代表者が、エジプト学及びエジプト考古学の専門家を研究分担者として、上記の目的を達成するために、以下のような方法によって研究を実施した。その際、国内におけるエジプト現地調査のプロジェクトや海外の研究者とも連携しながら、言語、エスニシティ、物質文化という3つの側面からの研究を経年的に行うこととした。とりわけ、基本となる史料については、エジプト及びギリシアで収集することとし、最終

年度にはモノグラフの形で研究の成果を公にすることとした。

(2) 言語の分析にあたっては、主としてニュー・メニア古代採石場に残されているグラフィティ(作業過程に採石場の壁面や天井面に書かれたメモ)の言語選択を手がかりにする。同採石場のグラフィティには、しばしば治世年が記されているため、ギリシア語とエジプト語(デモティック)のどちらが多く使われているのか、また、二言語併記の慣習がどのように消長したのかを追うことによって、言語面における文化変容の動態が明らかになるものと考えた。

(3) エスニシティの分析にあたっては、ニュー・メニア古代採石場に残されているグラフィティは、貴重な情報を提供している。というのも、グラフィティに現れる人名(おそらく現場における採石作業の従事者の名)からは、彼らのエスニックな所属を推測することができるからである。

(4) 物質文化の分析にあたっては、東地中海各地の遺跡の発掘報告書を参照しつつ、中エジプト・アコリス遺跡において1997年から2001年まで行われた都市域北端部における出土遺物をその対象とすることとした。これらの遺物については、まだ最終報告書が刊行されていないが、毎年刊行されている概報からも、一定の情報は得ることができ、また、担当者から提供された土器の編年図なども、有益な情報源となることが期待された。

### 4. 研究成果

(1) まず、言語の変化について、ニュー・メニア採石場におけるグラフィティの時系列的な変化は、これまでの研究により、それがプトレマイオス二世の治世末年からプトレマイオス四世の治世の初年に及び30年あまりの期間に相当するものであることが判明している。この間を通じて、グラフィティを記すために用いられた言語は、エジプト語であるデモティックの単独使用から、デモティックとギリシア語との併用へ、さらにはギリシア語単独使用へと推移したことが推測されていたが、本研究によって、この推測が基本的に正しいことが明らかになった。ニュー・メニア採石場では、デモティック単独使用の段階があったことは、状況証拠からの推測にとどまらざるをえないが、さらに南のデイル・アル・バルシャでは、ベルギー隊によってデモティックだけが用いられた前4世紀の採石場が調査されている。朱線と文字によって採石場の作業を管理するアイディアは新王国時代にまで遡るものであるが、この伝統は前一千年紀に入っても在地の採石場で連綿と継承され、ヘレニズム時代にまで至ったものと考えられる。一方で、残された文字の種別の調査だけからでは、このような言語

の変化が、現場で使用されていた言語そのものの変化によるものなのか、あるいはその言語を使用する労働者集団がエジプト人（エジプトを母語とする者）からギリシア人（ギリシア語を母語とする者）へと変化したものを判別することができないというディレンマが生じる。そこで、次の段階として、エスニシティの検討を進めることとした。

(2) エスニシティの判断基準となるのは、基本的には人名である。もちろん、人名が確実にエスニシティを反映している保証はないが、ギリシア系入植者と現地エジプト人女性との通婚を通じて普及したと推測される複名制の定着以前の段階にあたる前3世紀の文化変容を検討するにあたっては、人名は依然としてエスニシティを識別するための有効な判断基準たりうるであろう。このような前提のもとで分析を行った結果、少なくともニュー・メニア採石場からのデータを参照する限り、ギリシア系の名前とエジプト系の名前とは並存を続けており、採石作業においてはエジプト人とギリシア人とが協同して働く空間が現出していたことが明らかになった。これに付随して、彼らの社会的な位置に関しては、グラフィティの月名に顕著な季節性が認められる（財政暦の前半の半年間に多く、後半の半年間に少ない）ことから、彼らの中には季節労働として採石に携わる者が少なくなかったであろうことも明らかにされた。

(3) アコリス遺跡から出土した土器などの物質文化の特徴は、基本的にはナウクラティスやエレファンティネなどの遺跡のそれと共通するものである。この点に関して、今回に研究によって明らかになったのは、飲食用の食器と調理用の土器のいずれもが、ナイル・シルトのような在地の原料によって製作されながら、その器形の系譜をエジプトではなくギリシアに辿ることができるという事実である。そこからは、ヘレニズム時代には、ギリシア文化が地中海に面したアレクサンドリアなどに留まったとする通説とは裏腹に、中エジプトのような内陸部においても人々の食生活にはかなりの変化が生じていたという結論が導かれる。一方で、アコリスやエレファンティネからの知見は、このような食文化に関わる土器の組成の変化が、ヘレニズム時代の到来とともに生じたわけではなく、むしろ前7世紀のサイス朝の確立期から漸進的に展開されたものであることを物語っている。このことは、プトレマイオス朝の在地社会における文化変化が、アレクサンドロス大王の東征を契機に突如として引き起こされたものではなく、青銅器時代以来のギリシアとエジプトとの長い文化交渉の歴史の産物であったことを示唆しているが、この点については別の機会に検討することが必要であろう。

(4) ヘレニズムという概念の確立と普及に貢献したドロイゼンがオリエントの在地文化に対するギリシア文化の圧倒的な優位性を前提とした上で、ヘレニズム時代をギリシア文化が普遍性を獲得していく過程として位置づけたことは、プトレマイオス朝に対するコロニアルな理解に先鞭をつけることになった。ここでは、プトレマイオス朝エジプトに見られる様々な現象がコロニアルな文脈で、すなわち支配する側から植民地に与えられた恩恵という形で理解された。ところが、第二次大戦後、このようなコロニアルな言説が必然的に影を潜めるようになると、それに代わる新たな参照枠が求められるようになった。こうして新たなメタナラティヴの地位を獲得したのが、分離主義の言説である。分離主義の立場をとる研究者は、プトレマイオス朝の支配下においては、ギリシア人はギリシア人の、エジプト人はエジプト人の文化伝統を保持しつつ並存していたのであって、両者の間の相互交渉を通じた文化変容は最小限にとどまったと主張する。しかし、本研究の成果から判断する限り、分離主義のモデルは、コロニアルなモデルに反発するあまり、当時の領域部の社会の様々な局面で進行していた文化変容をあまりにも過小評価し過ぎている。この時代の文化変容の要因として第一に指摘されるべきは、この時代のナイル世界のモビリティの高さである。本研究の成果は、石材やアンフォラの交易を通じて、在地社会とアレクサンドリア、さらにはその彼方に広がる地中海世界とが連動していたことを立証している。第二に注目されるのが、この時期のナイル世界におけるギリシア系の入植者と在地エジプト人との物理的な近接性である。パピルス史料からも考古学的史料からも、ヘレニズム時代のナイル世界において、ギリシア系の入植者と在地エジプト人がそれぞれに排他的な居住空間を形成していたことは想定できない。この点は古くから指摘されてきたことではあるが、本研究の成果は、彼らが生業面でもしばしば協同的な関係にあったことを新たな資料を通じて実証した点で、きわめて重要である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8件)

周藤芳幸「南部エジプト大反乱と東地中海世界」『名古屋大学文学部研究論集史学編』60, 2014, 1-16. (査読有)

Yoshiyuki SUTO, Preliminary Remarks on the Labor and Organization in the Ptolemaic Quarries near Akoris, in Preliminary Report Akoris 2013, 2014, 4-7. (査読無)

周藤芳幸「コソンの像 古典期アテネにおける彫像慣習の一考察」『西洋古典学研究』61, 2013, 36-47. (査読有)

Yoshiyuki SUTO, Akoris: An

Archaeology of the Chora in Ptolemaic Egypt, Journal of School of Letters 8, 2012, 19-31. (査読有)

周藤芳幸「都市アレクサンドリアと初期ヘレニズム時代の東地中海」『名古屋大学文学部研究論集史学編』58, 2012, 49-65. (査読有)

周藤芳幸「初期青銅器時代エーゲ海の瓦と社会 -レルナの「瓦屋根の館」を中心として-」『古代』129/130, 2012, 77-99. (査読有)

Yoshiyuki SUTO and Ryosuke TAKAHASHI, Bilingual Graffiti from the Ptolemaic Quarries at Akoris and Zawiyat al-Sultan, in P. Schubert (ed.) Actes du 26e congrès international de papyrologie, Genève, 16-21 août 2010, Genève, 2012, 729-738. (査読有)

周藤芳幸「採石場のヘレニズム -前3世紀エジプト領域部の文化変容をめぐって」『名古屋大学文学部研究論集史学編』57, 2011, 1-17. (査読有)

〔学会発表〕(計 3件)

周藤芳幸「プトレマイオス朝エジプト在地社会と神官」人類文化遺産テキスト学研究センター公開シンポジウム「古代エジプトにおける宗教性と物質文化」, 2015年3月14日、名古屋大学(愛知県・名古屋市)

Yoshiyuki SUTO, Comparative Perspectives on the Emergence of Divine Honours in Ancient Greece and Prewar Japan, The Third Euro-Japanese Colloquium in Ancient Mediterranean World, 25 April 2014, Athens (Greece)

Yoshiyuki SUTO, Akoris: An Archaeology of the chora in Ptolemaic Egypt, The Archaeology of the Hellenistic Period in Egypt: Current Trends and Future Prospects, 13 October 2011, Yale University (USA)

〔図書〕(計 2件)

周藤芳幸『ナイル世界のヘレニズム エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会、2014, 423頁

周藤芳幸(共著)『アジアの王墓』高志書院、2014, 217-236頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

周藤 芳幸 (SUTO, Yoshiyuki)  
名古屋大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号: 70252202

### (2) 研究分担者

内田 杉彦 (UCHIDA, Sugihiko)  
明倫短期大学・歯科技工士学科・准教授  
研究者番号: 00211772

中野 智章 (NAKANO, Tomoaki)  
中部大学・国際関係学部・准教授  
研究者番号: 90469627